北海道教育大学学術リポジトリ
Hokkaido University of Education Repository
国立大学法人 北海道教育大学
HOKKAIDO UNIVERSITY OF EDUCATION

Yeatsの神秘主義：後期の詩と A Vision

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-11-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山下, 民雄 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00001615

第 20 巻　第 1 号　　北海道教育大学紀要（第一部A）　　昭和44年 7 月

Yeats の神秘主義

—— 後期の詩と *A Vision* ——

山　下　民　雄

北海道教育大学釧路分校英文学研究室

Tamio YAMASHITA: The Mysticism of Yeats.
—— His Later Poetry and *A Vision* ——

I

森羅万象の真理を求めるのに理性によるよりはむしろ直感によって探し求め，科学的な論理に基を置くよりは，神秘的な啓示を頼りに究めようと試みた詩人は数多いが，そのなかにあっても Yeats はその独自の神秘思想のためにとりわけ世の注目を喚起する詩人である．彼は最初の詩劇 *The Island of Statues* ほか数篇の抒情詩を *The Dublin University Review* に発表した前後にはすでに神秘の世界に深い関心を寄せていたといわれるが これは詩人自らの告白にその準拠を置くものであろう[1]．自伝によると八，九才のころに父親が読んで聞かせてくれた Scott の *Ivanhoe* や *The Lay of the Last Minstrel* に幼い Yeats は大きな感銘を受け，*The Lay of the Last Minstrel* を読んでもらった時などは大きくなったら魔法使いになってやろうという少年らしい夢を抱いたということである．魔術によせるこのような Yeats の幼い夢は後に彼が Blavatsky 夫人の降神術や Liddell Mathers のヘブライ神秘思想に深く傾頭したという事実をあげるまでもなく その生涯を通して形を変えこそすれひとときも消えやることのなかったものである．その青年時代の抒情において勝る詩の数々，幽玄的ないくつかの詩劇のなかにあってはそれはケルト的神話の世界の主役である変幻極りなき妖精 Sidhe の自在の姿となってあらわれ，あるいは Dorothy Hoare が指摘しているように[2] ラフワエロ前派運動の雄 William Morris の激賞を受けた Yeats 最初の注目すべき長詩 *The Wanderings of Oisin* 第一巻のなかで古代アイルランドの伝説的英雄 Oisin の放浪の旅に託して歌われた不老の理想郷への憧れという形をとっていたことは衆知のとおりである．詩における若い Yeats の神秘主義的象徴の世界が個性豊かな一つの輝かしい成果となってあらわれたのが1899年に出版された詩集 *The Wind Among the Reeds* である．この詩集における Yeats は古代のケルト的な神秘の世界にあって現世のかなたにある妖精の遊ぶ楽園の存在をアイルランドの貧しい農漁民たちに語りかける詩人である．夢うつつの幻想の世界に遊ぶ詩人にとっては天空を駈巡る妖精の群は絶えず魔風恋風の渦を巻きおこし

> …… *Away, come away:*
> *Empty your heart of its mortal dream.*[3]

と呼びかけては地上の人間に悲しみと苦しみばかりが多い現世から逃れてこいと誘いかけているように思われたのである。しかしながらこうしたケルト的伝説の世界に思惟の拠点を置くことにより自己の詩的活動を展開させていった Yeats は *The Wind Among the Reeds* の出版のあとしばらくの間こうした神秘の世界から遠のいていたように見受けられる。1910年に至るまでの数年間の Yeats についてはアイルランド演劇運動の指導者と呼ぶ方がむしろ妥当と考えられるとはしばしば言われることであるが，彼の生涯の著作活動を鳥瞰するに実際この時期は詩作の停滞が特に目立つ時である。ダブリンに彼がアベイ座を創設したのは1904年の夏であり，この劇場で Synge の *The Playboy of the Western World* が観衆の攻撃を浴びた時にこれを弁護して一躍男をあげたのが1907年のことであるが，まことに当時の Yeats は演劇運動の方に心血を注ぎ，*The Wiand Among the Reeds* 以前のケルト的神秘の世界から完全に脱して現実に強い関心を向け始めたかの感を多くの人々に与えていたのである。1910年前後における Yeats の魂はその七十余年の生涯を通して最も悩めるものであったといってよい。すでに四十代の男となった彼の心のなかには永遠の女性ともいえる Maud Gonne への思いが去りやらぬままにたぎり続け，外にあってはアイルランドの窮状がますます惨憺たる相貌を呈しつつあるという変動する歴史のただなかへ，真実を追求せずにはいられぬ一個の人間として好むと好まざるとを問わず降り立って行かなければならない情況が生じていたのである。こういった時期に詩人の面前に後の Yeats 夫人となった Georgie Hyde-Lees が出現したことについては，演劇活動を契機にせっかく足を地にふまえて歩き始め，さらに1916年にダブリンで勃発した復活祭当日の市民革命で生命を惜しむことなく理想のために散って行く人々を眼のあたりに見て自分の精神の脆弱さを痛く思い知らされた Yaats が1917年に彼女と結婚して間もなく再び神秘の世界に迷い込んだという見地に立つことが可能なことであることから，詩人にとって彼女と知りあったことははたして幸運なことであったかどうか，これはかなりに論議の分れる問題であると思われる。しかし Yeats は彼女との結婚によって神秘詩人としての変貌を遂げ，少なくとも以降の彼はケルトの薄明に憧れる昔の詩人ではもはやないというのが一般に下されている今日の評価である以上はこういった論議をすることは今はさしおいておくべきであろう。

Yeats が Ezra Pound に与えた書簡によれば，彼が結婚して間もない1917年の十月のある夜 Yeats 夫人は突然発作的な無意識の状態におちいり，自動筆記術という神秘不可思議な作業を始めて詩人に大きな衝撃を与えたということである[4]。この作業に没頭している夫人の一種の自己喪失の様子について Yeats は後年詩の中で

When the full moon swam to its greatest height
She rose, and with her eyes shut fast in sleep
Walked through the house. Unnoticed and unfelt
I wrapped her in a hooded cloak, and she,
Half running, dropped at the first ridge of the desert
And there marked out those emblems on the sand
That day by day I study and marvel at,
With her white finger. .....[5]

と述べているが夫人のこの神秘的体験が重要な契機となって詩人の魔術や占星術に関する異常

なまでの研究心が喚起され，後年その神秘主義の集大成とされる注目の書 *A Vision* (1925) となって世に問われるに至ったのである．*A Vision* の難解な神秘思想についてこれを正しく理解しうる人はまれであり，Yeats 自身を除いては他に理解出来る人はありえないとする辛辣な批評家も十指にあまるほどである．実際この書に見られる哲学は一にこれが Yeats 以外の人々に十分な説得力を持つことができなかったこと，二にこれが個人のしかも怪しげな霊的体験によって導き出されたものであるという点で同じ神秘の世界とはいえ歴史の試練に耐え，遍くアイルランドの人民に知れわたっていたケルト的な神秘思想とは大きな相違があるわけであるがその違いを述べることはさておいて今はこの書に盛られている神秘的論理の大要を以下に抽出し詩人の後期の詩のより正しい理解のための基としたい．

すでに述べたように *A Vision* の第一版は1925年に世に出たが1937年出版の増補改訂版をも含めてこの書物は Yeats が結婚以来たえず探究しつづけてきた独自の形而上学に理論的釈明を与えようとする試みから生まれた究極の成果であった．Yeats によれば[6] 彼自身はポーランドで発見された十六世紀の哲学書とメソポタミアの砂漠の砂上に描かれていた幾何学的な図形に興味を引かれた Yeats の想像上の人物 Mickael Robartes が双方の持つ形而上学的な意味に解決を与えることに成功したという想定のもとに *A Vision* の理論を展開した．*A Vision* の幾つかの断章のなかにあって詩人の最も重要な神秘理論が集約されている章である *The Great Wheel* によれば人類の文明は二千年の周期で輪廻し，この二千年の歳月は現象的には成長，完成，衰退という経過をたどっている．これらの現象は人間の運命を支配する象徴的な絶対者ともいえる The Great Wheel の運動の上にあり，歴史の移動はこの The Great Wheel の上に存在するその位置によって決定される．他方この The Great Wheel の運動は文明の成長，完成，衰退に伴ない月の相に変化をもたらす．Yeats は月の相におけるこの変化を二十八に区分し，第一相から第八相までは文明の成長期に，第九相から第十五相は完成期に，第十六相から第二十八相にかけてはその衰退期に相当するものと想定する．文明の最盛期にあたる第十五相は月が太陽から最も離れている状態すなわち満月の時をあらわすが，これは人類の文明に当てはめてみるとキリスト教文化が栄華をきわめたビザンチン文化およびルネサンス文化の時代に相当する．そして現代二十世紀は月が第一相に向かってその回転を速めている時代であり，次に現われる二千年の新しい文明の黎明に近づきつつある時代である．月の相の上では現代は二十五相に相当する．なお第一相の暗黒の月は Moon in Sun の状態にあり，第十五相の月は Sun in Moon の状態にあると考えられる．Moon in Sun の状態にある月は形而上の完全客観を代表し Sun in Moon の月は完全主観を代表するが前者の状態を名付けて Yeats は primary tincture とし，後者のそれを antithetical tincture と呼んでいる．このように The Great Wheel の上に位置する月の相の変化に呼応して人類の歴史は巡るわけであるがこの時その性格の多様さのために主観と客観の混合体として扱われる人間は，月の第一相と第五相がかような混合体として扱われるものではないがゆえに時代に対して固有の性質を有することになる．こうして Yeats の神秘主義的論理により人間は Will, Mask, Creative Mind, Body of Fate といわれる四つの基本的な機能を与えられることになる．このうち Will とは人間の意志そのものであり Mask とは Will の対象物すなわち人間が成りたいと希望するそのものである．この意味で Mask は社会的な武器でもあり人間が他の人間に示すことができる自我といえるものである．また Creative Mind とは Will の働きかける知力をあらわし Body of Fate は Creative Mind の対象となる環境で例えば変移する人間の肉体など外界の影響に支配されるものである．四つの機能のうち Will と Mask, Creative Mind と Body

of Fate はこのようにれそぞれ対立するものであるが，人間の性格諸相を月の相の上に当てはめてみると Will が第十相に属する人間，Yeat のたとえによるとアイルランド独立運動の尖鋭 Parnell のような人間はそれと対極にある第二十四相において Mask をかぶり，第十九相の Will を持つ Byron や Wilde のような人間はその対極の第五相において Mask をかぶっている．これら四つの機能の中で Yeats の神秘思想に最も深く関係するのは Mask である．すでに述べたように Mask は単なるイメージではなく，一人の人間が他の人間に示すことのできる社会的な武器である．詩人はとりわけ Mask を通して表現され．詩を書く時にその時の自分の気分に従って恋人とか聖人とか嘲笑者の Mask をつける．Yeats の場合には彼の想像上の人物である Michael Robartes とか Hanrahan とか Aengus などが詩人の詩情の変化に応じて時には情熱的に時には瞑想的に詩的表現のための武器として巧みに使い分けされているがこれらの人物はとりもなおさず Yeats 自身の Mask をつけた姿なのである．

さらに The Great Wheel の中には Gyre と呼ばれる象徴が存在し Yeats の神秘思想にいま一つの重要な意味を与えているが，これは1917年十二月六日の夜に夫人の自動筆記にあらわれた新しい象徴である．Gyre は運命の輪とも言うべきものであり円錐または渦巻状をなしているがその頂点は主観を底辺は客観を代表する．これらはそれぞれ Primary Gyre と Antithetical Gyre と呼ばれるが前者は陽を後者は陰の性質を持ち対立するものの相剋を司る機能を持つ．双方の Gyre は常に一方の Gyre が互いに他方の Gyre の底に達して結合し，Will と Mask, Creative Mind と Body of Fate は共に矛盾する作用を行ないつつも結合している Gyre の中に併存している．なお，Yeats の論理によれば人間には意識されることがないままに宇宙には Daimon と呼ばれる指導が常に君臨しているが Yeats はこれを人間の自我の究極の理想像であると考えている．すでに述べた人間の機能は Daimon の持つ四つの記憶から派生したもので例えば Body of Fate は人間がこれまでに経験してきた人間化についての記憶から生じたものであると考えられる．

以上 Yeats の *A Vision* の思想の大まかな理論を抽出してみたわけであるが彼独自のこうした占星術的世界観については何分にも納得のいかない点が多く実際たいした興味をそそられるものではないといってよい．むしろ問題とすべきはこのような理論を展開することによって詩の上で Yeats がいかなる変貌を遂げたかということを実際の作品の中に探ってみることであろう．

II

詩の上に Yeats が *A Vision* で展開した神秘思想の象徴を初めて用いたのは1925年のこの書物の初版発行の年はもとより Hyde-Lees との結婚によって霊的な啓示を与えられた問題の年1917年よりもさらにさかのぼっている．その最初の例は1910年に出た詩集 *The Green Helmet and Other Poems* の中にみられる短詩 *The Mask* であろう．この詩はその暗示的な標題もさることながら Unterecker らが述べているように[7] 新しい象徴 Mask を初めて Yeats が詩の上に用いたという意味においてまず第一に検討すべき作品である．

'Put off that mask of burning gold
With emerald eyes.'
'O no, my dear, You make so bold
To find if hearts be wild and wise,

And yet not cold.'

'I would but find what's there to find,
Love or deceit.'
'It was the mask engaged your mind,
And after set your heart to beat,
Not what's behind.'

'But lest you are my enemy,
I must enquire.'
'O no, my dear, let all that be;
What matter, so there is but fire
In you, in me?'[8]

この短詩の中で詩人は自分の心を捕えたのは果して女の現身なのか，あるいは女がかりに付けた仮面なのか解明しようと試みているわけであるが，ここにはまだ作者が仮面によって何を象徴しようとしたかということは明らかにされていない．この詩にはただ愛の心はどうであれ外なる容貌によって人の心が燃えあがるのが事実であってみれば，女を判断するのには表面にあらわれた外貌だけで十分ではないかという恋の遊びが歌われているにすぎない．しかしこうした見解とはべつに A. G. Stock も述べているように[9] この詩は同じく *The Green Helmet and Other Poems* の末尾を飾る *Brown Penny* とともに Yeats が何気ない気まぐれの恋の発見をするに至ったことを示すものであり，恋の夢想に侵って

But I, being poor, have only my dreams;
I have spread my dreams under your feet;
Tread softly because you tread on my dreams.[10]

と歌った一昔まえの夢そのものをいわば自己の仮面と考え，ただ夢を見ることのみが自分の誇りであると信じて疑わなかった詩人が新しい世界に降りつつあることを如実に示すものでもあるわけで軽くは見すごすべきではない作品であることは言うまでもないことであろう．詩人が1917年に霊的な啓示を受けるまえに書かれた詩で彼の後の思想に最も深く関るものは Reid 等も強く指摘しているように[11] 1914年に出版された詩集 *Responsibilities* のなかの八行詩 *The Magi* と考えてさしさわりはない．

Now as at all times I can see in the mind's eye,
In their stiff, painted clothes, the pale unsatisfied ones
Appear and disappear in the blue depth of the sky
With all their ancient faces like rain-beaten stones,
And all their helms of silver hovering side by side,
And all their eyes still fixed, hoping to find once more,

Being by Calvary's turbulence unsatisfied,
The uncontrollable mystery on the bestial floor.[12)]

この詩ではキリスト降誕の時に供物をたずさえて東方の国からベツレヘムにやって来たと伝えられる三人の賢人がどうにも理解できない不思議な事件，すなわち奇跡とともに生誕したキリストが死ぬ時には極めて人間的な死を遂げたということに得心がゆかずに動じている影像となって Yeats の心眼に捕えられているが，これは *A Vision* のなかで体系的に説明される歴史の回転運動に関するものであり後に Yeats が *The Second Coming* あるいは *Gyres* などの詩において更に追求を試みる課題となるものである．ここにあらわれる三賢人の様相を伝える stiff, painted clothes あるいは ancient faces like rain-beaten stones などの語句はかなりに神秘めいたイメージであり，その異様な相貌には明らかに Mask を暗示するものがあると Unterecker は述べている．[13)]

1917年以前の作品の中から後期の詩の課題となる神秘の影を二つの詩例により探ってきたわけであるが Yeats の哲学が開花を見るにはこれまでにも述べてきたように夫人の自動筆記術による神秘的な啓示が欠くことのできないものであった．1919年の詩集 *The Wild Swans as Coole* にはこの啓示によって生じたものと考えられる新しいイメージ，すなわち月の相とか The Great Wheel に関連する数篇の詩が見られるが，このことはとりもなおさず詩人に与えた夫人の影響がいかに大きなものであったかということを如実に示すものであろう．

Twenty-and-eight the phases of the moon,
The full and the moon's dark and all the crescents,
Twenty-and-eight, and yet but six-and-twenty
The cradles that a man must needs be rocked in:
For there's no human life at the full on the dark.[14)]

Yeats の魔術あるいは占星術ともみられる後期神秘思想の柱をなすものはすでに述べたように The Great Wheel であり，その上に位置して変化する月の相であるが，上の詩も一部には魔術に対する興味よりもむしろ Yeats がすでに数年前に熟読していた Chaucer の詩に影響されて書かれたものであるという見解[15)] が根強く見受けられるけれども，月の位置によって人間の運命が決定されるという Yeats の持論がまず第一に示されていると考えてよいものと思われる．この詩は Michael Robartes と Aherne という Yeats の想定した想像上の人物の対話詩の一部で Robartes が Aherne に自分の歴史観を語りかけているところである．ここで Robartes が第二十六相あるいは第二十八相を人間のはぐくみ育てられる揺籃であると述べているのは Yeats の理論からするとこれらの相が歴史の衰退期に位置する相であることからして矛盾であるとも考えられるが，詩人の言うように歴史の衰退の中にすでに新しい歴史の胎動が始まっているという論理をもってすれば後に *The Second Coming* などでさらに適切な例がみられるようにこの逆説は十分に理解できるものと考えられるのではなかろうか．

同じ詩集の最後を飾る *The Double Vision of Michael Robartes* はこうした理論をさらに深化したものである．

On the grey rock of Cashel the mind's eye
Has called up the cold spirits that are born
When the old moon is vanished from the sky
And the new still hides her horn.[16)]

これはこの詩の第一連であるが後半の二行は明らかに *The Phases of the Moon* の中にみられたところの滅びゆく古い歴史の中にすでに新しい歴史の動きが始まっているという論理と重なるものである．次に同じ詩の第二連をみてみよう．

On the grey rock of Cashel I suddenly saw
A Sphinx with woman hreast and lion paw,
A Buddha, hand at rest,
Hand lifted up that blest ;

And right between these two a girl at play
That, it might be, had danced her life away,
For now being dead it seemed
That she of dancing dreamed.[17)]

ここでは女の胸とライオンの足を持ったスフインクスが知性を象徴し，対して感情そのものを象徴するのは釈尊であるとされている．そしてこの両者の間で無心に踊る娘はすでに踊子個人を超越して踊りそのものになりきっており，肉体と精神の調和をたえず求めていた Yeats は後にも

O body swayed to music, O brightening glance,
How can we know the dancer from the dance ?[18)]

と歌って一体となった踊りと踊子のうちに芸術のあるべき姿を垣間見たのである．なお Michael Robartes が *The Phases of the Moon* の中ですでに語り，*The Double Vision of Michael Robartes* にもみられた歴史観および，スフインクスのイメージは直接に次の詩集 *Michael Robartes and the dancer* の中の傑作 *The Second Coming* につながるものである．女の胸とライオンの足を持ったスフインクスの像は *The Second Coming* においてはキリストと同じようにベツレヘムで生まれようと今やのっそり腰をあげた

A Shape with lion body and the head of a man,[19)]

というまさに無気味な姿となってあらわれてくるのである．ここではスフインクスということは明示されずにいるが Yeats 自身の言にもあるように[20)]，確かにこれはエジプトのスフインクスに準ずるものであり，女の胸を持っていた古代ギリシャのものとは異なったものであるということは論を待たないことであろう．歴史の輪廻に関する詩人の神知学的解釈がこの詩においてはさらに明確にあらわれてきている．それはこの詩の第二連頭初に呪術的な語の反復とともに

Surely some revelation is at hand;
Surely the Second Coming is at hand.
The Second Coming!.....[21]

という決定的な託宣となってあらわれ，さらに

The twenty centuries of stony sleep
Were Vexed to nightmare by a rocking cradle,
And what rough beast, its hour come round at last,
Slouches towards Bethlehem to be born?[22]

という表現が生まれるに至って二千年間続いたキリスト教文明が今や終焉を迎える時がやってきたということを Yeats は確信したのである．

さらにこの詩にあらわれた Gyre のイメージについては Mask とともにこれが Yeats の詩的象徴の双璧をなすがゆえに特別の考慮が払われなければならないものと思われる．第一連の冒頭で

Turning and turning in the widening gyre
The falcon cannot hear the falconer
Things fall apart; the centre cannot hold;[23]

と歌って新しい歴史の胎動を鷹匠の指図に背いて旋回する鷹の飛翔に読みとった Yeats は後連においては半獣神の上を旋回する砂漠の鳥の飛翔に Gyre の象徴された様を見たのである．しかしこうした鳥の旋回が Yeats の神秘思想にどれほど関係があるかということになると Yeats の本心は別としてこの両者を直接に結びつけて考える必要はないとする論の方が優勢になっているように思われる．Allen Tate らが指摘しているように[24] *A Vision* の Gyre の体系などとは無関係に第一連冒頭の二行はその持つ意味を十分に理解できるものであり，鷹の飛ぶ輪がだんだん拡がってついには帰着すべき中心点と接触が無くなってしまうということで Yeats が現代の混沌を象徴したということは良く理解しうるものなのである．

A Vision 出版後三年目に出た詩集 *The Tower* はさらに深まった Yeats の詩想を示すものである．*Sailing to Byzantium* はその巻頭を飾る佳作であり R. Fréchert も述べているように[25] Yeats の芸術の永遠性によせる憧れのために Keats の *Ode on a Nichingale* や *Ode on a Grecian Urn* を髣髴させるといわれる二十世期の抒情詩である．この詩には六十才を超えた老詩人の芸術観や人生観がよく述べられているが今はその細目について多くを語ることはしまい．ただ Yeats がこの詩に付した註で自分はビザンチウムにある皇帝の宮殿には金と銀で作られた木が立っていて人間の手によって作られた鳥が歌を歌っているということをどこかで聞いたことがある[26] と述べていることから，この詩は彼がビザンチウムの都にあるという金細工の鳥になって自分もまた芸術作品の持つ永遠性を手にしたいという自らの祈りをこめて書いたものと思われることをここでは述べておきたい．この詩においては Gyre のイメージは第三連にあらわれる．

O sages standing in God's holy fire
As in the gold mosaic of a wall,
Come from the holy fire, perne in a gyre,
And be the singing-masters of my soul.[27]

この gyre もやはり偉大な回転力を持ち，生と死，明と暗，老いと若さなどの対立する概念の象徴である．ここではそれは地上的な経験を芸術の永遠性にまで高める能力を持たされているのであるが，その力をこの詩においては詩人はまだ十分に御しえていないといわれている．gyre の持つ秀れた力はさらに後年になって *A Full Moon In March* の中で

There all the barrel-hoops are knit,
There all the serpent-tails are bit,
There all the gyres converge in one,
There all the planets drop in the Sun.[28]

と歌われて一歩その統一性を深めたあとで *Last Poems* に至り次のように証明されることになるのである．

The gyres! the gyres! Old Rocky Face, look forth;
Things thought too long can be no longer thought,
For beauty dies of beauty, worth of worth,
And ancient lineaments are blotted out.
.....
Conduct and work grow coarse, and coarse the soul,
What matter? Those that Rocky Face holds dear,
Lovers of horses and of women, shall,
From marble of a broken sepulchre,
Or dark betwixt the polecat and the owl,
Or any rich, dark nothing disinter
The workman, noble and saint, and all things run
On that unfashionable gyre again.[29]

この詩は *The Second Coming* に関連し，辞世の詩ともいうべき *Under Ben Bulben* につながってゆくがゆえに Yeats の Gyre のイメージを探るうえで欠くことのできないものである．ここにあらわれる Gyre は Yeats の Gyre の中では最も哲学的重要さをもたせられたものであり．詩そのものの題材をすでに超えて全宇宙的な現象をいまや展開しているといってよい．Vivienne Koch によるならば[30] Old Rocky Face とは Mask をかぶった老いたる Yeats 自身のことであり，馬や女性を愛して止まない人間であって *The Magi* にあらわれた ancient faces like rain-beaten stones とか *The Second Coming* の中の twenty Centuries of stony sleep を眠ったスフインクスのイメージと重複するものである．さらにこの詩の初めにある look forth という

呼びかけをよく分析してみれば Rocky Face が実は詩人自身の反対我の象徴であって自らが予言者としての仮面をかぶっていることのあらわれであるということが理解できるものと思われる．

Yeats は七十才を過ぎ床に臥しがちになって後も Gyre の運動に深い関心を持ち続け1938年の初冬に書かれた死の四ヶ月前の詩 *Under Ben Bulben* の中では

Gyres run on
When the greater dream had gone
Calvert and Wilson, Blake and Claude,
Prepared a rest for the people of God,
Palmer's phrase, but after that
Confusion fell upon our thought.[31]

と歌ってその死のまぎわまで現世の混述に心を寄せていたことが窺われるのであるが，ここには自らの近付きつつある死とともに，Yeats の哲学による歴史の周期がその終りにやってきたことがすでに Yeats 自身の神秘思想そのものを越えて述べられているのである．

III

数篇の詩を引用して Yeats の後期の神秘主義思想の展開を探ってきたわけであるがその超自然の世界には改めて言うまでもなくあまりに不可解な点が多い．Middleton Murry は *The Wild Swans at Coole* を出版したころから再び何とも説明のつかないまぼろしの世界に迷い込んだ Yeats を評してこれは正気の沙汰ではないと極言し[32]，1934年には T. S. Eliot も Yeats の超自然界なるものは何の精神的意義を持ったものでもなく単に低俗な神話を詭弁化したものにすぎないと述べているように[33]，晩年の二十年間 Yeats は批評家たちの不評の最中にあったといって過言ではない．S. Spender なども1935年には Yeats の詩人としての個性の発展には Goethe を髣髴させるものがあるとの賛辞を呈しながら，一方では魔術や占星術に異常なまでの興味を持ち，降神会などに出向いて幽霊の存在を確かめようとする Yeats に戸惑いの眼を向けている[34]．しかしながらこのような見解とは別に詩人の神秘主義への移向を好意的に考える人たちも少なくはない．Cleanth Brooks, Jr. は Murry などの厳しい批評に対して，もし Yeats が単なる現実からの逃避者であるとしたならば自然界と超自然界との統合を計ろうとする野心的な試みを Yeats は持たなかったであろうと考え，*A Vision* は詩人が人生から逃れるのを拒絶したからこそ生まれたのだと指摘して科学を信ずるあまりに人々は Yeats の哲学を誤解して受けとめていると弁護する[35]．また Yeats の詩について精通している批評家の一人 Blackmur は Yeats が現実認識のために用いた主要な武器は魔術であったとしてその非科学的な方法論をいぶかしがりつつも彼の詩はその深さと多様さのために Dante や Shakespeare の作品に比すべきものを持っていると述べ，魔術そのものについても Yeats にとってはこれは Eliot におけるキリスト教，Hardy における運命論と同様のものであって一切の創作活動の根源であったと理解ある見解を示している[36]．同様の意見は D. Daiches においてもみられる[37]．彼によれば Yeats は詩の表現そのもののために独自の体系を必要としたのであるが，これら三人のような批評家の見解は Yeats 自らがその自伝で述べているように[38] 若年のころよりすでに科学万能の世界に不信を持ち，自己の魂の発展のためには科学に代る体系が不可欠であることを早くより認識していた詩人にとっては

大きな救いとなるものであろう．科学が信ずるに値しないものであり，さりとて若いころに夢みたケルトの薄明の世界が現世の混迷や矛盾，アイルランドの窮状を考える時には何の用もなさないということを痛く認識するに至ってみれば神秘的なものであれとにかくもっと体系的な形而上の世界に身を投ずる以外に Yeats には方法がなかったかのようである．1910年前後の Yeats は演劇運動の行きづまり，Maud Gonne との実らぬ恋，Hugh Lane の絵画寄贈問題をめぐっての旧友 George Moore との激しい論争，それに1916年の復活祭反乱へと連なる世情の不安に精神をすりへらしていた．Yeats の死後夫人が告白したように二人の年令の隔りが大きなこともあって彼は結婚後も気分がふさぎがちであった．こうした Yeats の関心を捕えるために故意に彼女は自動筆記術なる芝居を打ったと言うことであるが，見せかけのその神秘に詩人が易く引きこまれていったのは自らの過去が不毛のものであったことを痛感し，身心ともに疲労困憊して自分だけの世界にどうにかして閉じこもりたいという気持が無意識のうちに働いていたせいではなかろうか．もっとも芝居を演じているうちに夫人が自己暗示にかかり，一種の催眠状態におちいって見せかけだった自動筆記術が本物に転化したということは十分に考えられることであるが，いずれにせよ *A Vision* に集約される Yeats の神秘思想の基となった夫人の体験も初めはこのように極めていいかげんなものだったのである．こう考えてくると Yeats の詩のための新しいメタファーを求める願望の強さは否定できはしないけれどもそれ以上に何とかして煩しい現実の世界から離れたいという気持の方がより強く Yeats の心の中にあったとする見解も妥当性を帯びてくるようである．最近の Yeats に対する評価は死後三十年を経て一つの転機を迎えつつある．一年前に逝去したアメリカの批評家 Yvor Winter は妙な哲学を理解しなければその詩人が理解できないようではその詩人は二流の詩人でしかないと述べて Yeats を攻撃していたし[39]，S. Spender が編集した未着の新書によるならば Yeats は Eliot, Ezra Pound, D. H. Lawrence 等と同罪の反動主義者ときめつけられているとのことである．ドイツ全体主義に近づいた Pound と親交を結んだこともあって Yeats はこれまでにも幾度か反動呼ばわりをされたことがあったが，これほどに徹底したものは見られなかったと言ってよい．ただ革命のために自らの命をかけて戦ったアイルランドの尖鋭たちの死を思い

I write it out in a verse ——
MacDonagh and MacBride
And Connolly and Pearse
Now and in time to be,
Wherever Green in worn,
Are changed, changed utterly:
A terrible beauty is born.[40]

と歌って同志の雄々しい行動にかつては強い衝撃を受けたこともあるこの詩人をその伝統主義，神秘主義のために反動主義者と一言で片づけてしまうことはできないことと思われる．そのように断を下してしまうにしては Yeats という詩人はあまりに複雑な人であり，内的矛盾をはらんだ人であった．Monk Gibbon は難解な哲学を抱きながらも後年に至り現実の混沌に深く下り立った Yeats を評して彼は怒れる老人とでも言うべき人間であり，1950年代にあらわれた怒れる若者たちの先駆であると述べているが[41]，第二次世界大戦後の新しい時代を最も敏感に感じとっ

たとされる怒れる若者たちが当時果した役割を現在軽く見ることができないと同様に，第一次世界大戦後の混迷かつ流動する歴史の最中にあって最もその時代を鋭く認識していた人間の一人である Yeats もまた1920年代，1930年代の詩人としてその時点において評価されるべきであるという見地に立つならば Gibbon の見解は理にかなったものと思われるのである。

註

1) W. B. Yeats, *Autobiographies* (Macmillan, 1961) p. 46.
2) Dorothy M. Hoare, *The Works of Morris and of Yeats in Relation to Early Sage Literature* (Cambridge University Press, 1937) pp. 113–114.
3) W. B. Yeats, *The Collected Poems of W. B. Yeats* (Macmillan, 1967) p. 61.
4) W. B. Yeats, *A Vision* (Macmillan, 1962) p. 8.
5) *The Collected Poems of W. B. Yeats*, p. 518.
6) *A Vision*, pp. 37–41.
7) John Unterecker, *A Reader's Guide to William Butler Yeats* (The Noonday Press, 1964) p. 108.
8) *The Collected Poems of W. B. Yeats*, p. 106.
9) A. G. Stock, *W. B. Yeats: His Poetry and Thought* (Cambridge University Press, 1961) p. 97.
10) *The Callected Poems of W. B. Yeats*, p. 81.
11) B. L. Reid, *William Butler Yeats: The Lyric of Tragedy* (University of Oklahoma Press, 1961) p. 102.
12) *The Collected Poems of W. B. Yeats*, p. 141.
13) *A Reader's Guide to William Butler Yeats*, pp. 128–129.
14) *The collected Poems of W. B. Yeats*, pp. 184–185.
15) Norman Jeffares, *W. B. Yeats: Man aud Poet* (Routledge, 1962) p. 195.
16) *The Collected Poems of W. B. Yeats*, p. 192.
17) *Ibid.*, pp. 192–193.
18) *Ibid.*, p. 245.
19) *Ibid*, p. 211.
20) Richard Ellmann, *The Identity of Yeats* (Faber and Faber) p. 259.
21) *The Collected Poems of W. B. Yeats*, p. 211.
22) *Ibid.*, p. 211.
23) *Ibid.*, pp. 210–211.
24) James Hall and Martin Steinmann (eds.), *The Permanence of Yeats* (Collier Books, 1961) p. 104
25) D. E. S. Maxwell and S. B. Bushrui (eds.), *W. B. Yeats: Centenary Essays* (Ibadan University Press, 1965) pp. 217–218.
26) *The Collected Poems of W. B. Yeats*, p. 532.
27) *Ibid*, p. 217.
28) *Ibid.*, p. 329.
29) *Ibid.*, p. 337.
30) Vivienne Koch, *W. B. Yeats–The Tragic Phase: A Study of the Later Poems* (Routledge, 1951) p 49.
31) *The Collected Poems af W. B. Yeats*, p. 400.
32) *The Permanence of Yeats*, pp. 9–10.
33) G. S. Fraser, *W. B. Yeats* (Longmans, 1962) p. 6.
34) *The Permanene of Yeats*, pp. 160–166.
35) *Ibid.*, pp. 61–63.
36) *Ibid.*, p. 38.
37) *Ibid.*, p. 109.
38) *Autobiographies*, pp. 115–115.
39) Yvor Winter, *The Poetry of W. B. Yeats* (Allan Swallow, 1966) p. 26.
40) *The Collected Poems of W. B. Yeats*, p. 205.
41) Monk Gibbon, *The Masterpiece and the Man: Yeats as I Knew Him* (Rupert Hart-Davis, 1959) pp. 211–212.